

## 〈 論 説 〉

## 竹馬の操作方法と歩行文化との関係

——日本とヨーロッパとの比較を通して——

谷釜 尋徳

## 1. 問題の所在

『民族遊戯大事典』において「竹馬」は、「背丈ほどの竹の棒2本に、それぞれの下部に短い横木を固着し、その横木に左右の足を乗せ、手で竹棒を操って歩行する玩具。」<sup>(1)</sup>と第一義的に説明されている。これは今日の日本人が竹馬に抱く一般的なイメージであろう。ところが、『日本風俗史事典』で「竹馬」を引くと、「竹を馬に見立てて、子供が乗って遊ぶもの。古くは、葉のついた笹竹の手もとに手綱の紐を取りつけてまたがり、引きずって走る。(中略)室町時代の田楽に使用した鷲足や木製の高足が、江戸時代には二本の竹竿に横木をつけて乗る竹馬となる。」<sup>(2)</sup>との解説がみられる。

このように、日本において「竹馬」という場合、『日本風俗史事典』の表現を借りれば少なくとも「引きずって走る」タイプと「横木をつけて乗る」タイプを想定しておかねばならないが、本稿が取り上げるのは日本では近世に至って登場した後者の竹馬の方である。

これに類する竹馬は、遊戯性ないしは実用性を帯びたものとして世界中に広く分布している。しかし、その操作方法是全世界に共通しているわけではない。現に、日本とヨーロッパとを比較してみると、双方の竹馬の操作方法には明らかな違いが見られるからである。もとより、人間は生物学的与件の許す範囲内において様々な動作を行なうことが可能であるがゆえに、竹馬を操って歩

(1) 寒川恒夫「竹馬」『民族遊戯大事典』大修館書店、1998、104頁。

(2) 相馬大「竹馬」『日本風俗史事典』弘文堂、1979、390～391頁。

行する方法も洋の東西で異同が見出されて然るべきであろう。それでは、日本とヨーロッパの竹馬の操作方法に違いがみられる理由とは何であろうか。

演劇評論家の武智鉄二によれば、日本古来の歩行は「日本民族のような純粋な農耕民族（牧畜を兼ねていない）の労働は、つねに単え身でなされるから、したがってその歩行のときにもその基本姿勢（生産の身ぶり）を崩さず、右足が前へ出るときには、右肩が前へ出、極端に言えば右半身全部が前へ出るのである。」<sup>(3)</sup>と説かれている。かつての日本人の歩行が、農耕生産の基本である「半身」の姿勢の連続的動作によって前進するものであったとするのが武智の理論であるが、この「ナンバ」歩きは日本人が竹馬に乗る際の身体の動かし方と似通っている。

こうした身体動作の類似性に鑑み、本稿では日本の竹馬の操作方法は、武智がいうような日本古来の歩き方に影響を受けていると考えている。つまり、日本人が元来持っていた歩行文化がそのまま竹馬の操作方法に移し替えられていると見なそうというのである。これが無理のない見解であるとするれば、ヨーロッパの竹馬の操作方法と歩行文化との間にも、日本の場合にみられたような関係性が確かめられるはずである。このことが明らかになれば、先に触れたように日本とヨーロッパの竹馬の操作方法に違いが生じている理由は、各々の歩行文化の異同に求めることができよう。そこで本稿では、竹馬の操作方法と歩行文化との関係性を日本とヨーロッパとの比較を通して明るみに出すことにしたい<sup>(4)</sup>。

ところで、竹馬を対象とした主要な研究として、本稿では寒川恒夫の「比較

---

(3) 武智鉄二『舞踊の芸』東京書籍、1985、148頁。

(4) このような手法を採る場合、用いる資料の年代が一定の意味を持つことになるが、資料の残存状況からして、日本とヨーロッパの竹馬に関する事情を同時代の資料によって比較検討することは困難である。ゆえに、本稿は時代性という枠組みを無視した試論として展開するものであることを予め断っておかねばならない。また、本稿は歴史民族学的手法を用いて竹馬の伝播経路を問題とするものでもないが、寒川がいうように日本を含むアジア・オセアニアの竹馬はヨーロッパの竹馬とは起源地を異にしているとの立場をとるものである（寒川恒夫「比較民族学からみた日本の竹馬の系譜」『遊びの歴史民族学』明和出版、2003、94～95頁）。

民族学からみた日本の竹馬の系譜」<sup>(5)</sup>、Kaudern の “Games and dances in Celebes”<sup>(6)</sup>、Lindblom の “The use of stilts especially in Africa and America”<sup>(7)</sup> 及び “Further notes on the use of stilts”<sup>(8)</sup> を取り上げておきたい。寒川は歴史民族学的な観点から、日本の竹馬の系譜がアジア・オセアニアの分布圏に連なるものであることを指摘した。また、Kaudern は 1917～1920 年の期間において実施した調査を基に “Game” の一項目として “stilts” を取り上げて、インドネシア周辺の竹馬の事情を詳らかにし、その中で日本やヨーロッパの竹馬についても言及している。Lindblom は 2 点の論稿において、竹馬の起源を明らかにすべく世界中の竹馬の事例を蒐集してその儀礼性と実用性を事細かに論じている。上記の諸論稿は世界中の竹馬の事情を操作方法を含めて詳しく伝えている点で、資料として大いに活用しうるものである。しかしながら、本稿のごとく竹馬の操作方法と歩行文化との関係性を追求する趣旨のものではなかった。

上記のほかにも、松本典子<sup>(9)</sup>や小鮎幸洋ら<sup>(10)</sup>は竹馬の操作方法そのものに関して分析しているが、いずれの研究もその操作方法を決定づける要因にまで立ち入って検討されていない。

なお、本稿では竹馬にまつわる諸事情を知るための手掛かりとして、いわゆる文字資料のみならず非文字資料としての「図像」に着目している。人間の身体の動かし方を問題とする場合、視覚的描写による非文字資料は時として文字資料よりも遥かに有効な機能を発揮しうる媒体だからである。そこで、竹馬の操作方法を図像学的な視角を交えて考察するために、本稿では主として Gaulhofer<sup>(11)</sup>、Panofsky<sup>(12)</sup>、Burke<sup>(13)</sup>、黒田日出男<sup>(14)</sup> の研究成果を参考にする。

(5) 寒川恒夫「比較民族学からみた日本の竹馬の系譜」『遊びの歴史民族学』明和出版、2003、85～96頁。

(6) Walter, Kaudern. Games and dances in Celebes : Results of the author's expedition to Celebes 1917-1920 4, Goteborg, 1929.

(7) K.G, Lindblom. The use of stilts especially in Africa and America, Stockholm, 1927.

(8) K.G, Lindblom. Further notes on the use of stilts, Stockholm, 1928.

(9) 松本典子「伝承あそびと運動感覚」『鳥取短期大学研究紀要』48号、2003、79～86頁。

(10) 小鮎幸洋・藤波努「竹馬乗り歩行の運動解析」『日本機械学会 シンポジウム講演論文集』2006、213～215頁。

## 2. 日本の竹馬の操作方法と歩行文化との関係

### 2-1 日本の竹馬の形状と操作方法

ここでは、近世後期から明治初期頃の資料に基づいて、日本の竹馬の形状と操作方法を探るものである。

江戸の風俗を考証した山東京伝の随筆『骨董集』（1814～15）には、竹馬に関する記事がみられる。京伝いわく、「御國の古代の竹馬は、唐山の竹馬とは異なり、葉のつきたる生竹の縄を結びて手綱とし、これにまたがりて走るを、竹馬の戯といふ。」<sup>(15)</sup>とあるように、元来日本の竹馬とは枝葉のついた笹竹にまたがりて手綱を引いて走るような遊びで、今日のような2本足の竹馬ではなかったことがわかる。

本稿で取り上げるのは、2本の棒を操って歩行する竹馬の方であるが、その形状を明示した最古の文献<sup>(16)</sup>として北静廬が著した『梅園日記』（1845）をあげることができる。同書には「鷺足」という項目において、「竹二本に足踏かくべき木を横に結つけて小児の戯れに乗物なり」<sup>(17)</sup>と記されているので、少なくとも19世紀半ば頃の日本には上記の形状からなる竹馬が存在していたと見なされよう。

時代は下って幕末期の百科事典『守貞漫稿』には「竹馬馳」という項目が設けられ、そこには「古は枝葉ある生竹に縄をつけ、手綱となし、これにまたがりて走るを、竹馬の戯といふ。」と記されている。

(11) Karl, Gaulhofer. Die Fusshaltung, Kassel, 1930.

(12) エルヴィン・パノフスキー著、浅野徹ほか4名訳『イコノロジー研究』美術出版社、1971。

(13) ビーター・バーク著、諸川春樹訳『時代の目撃者—資料としての視覚イメージを利用した歴史研究—』中央公論美術出版、2007。

(14) 黒田日出男『姿としぐさの中世史—絵図と絵巻の風景から—』平凡社、1986。／「絵画史料から何がわかるか—考え方と方法論—」『絵画史料の読み方（朝日百科 日本の歴史・別冊 歴史の読み方）』朝日新聞社、1992、2～19頁。／「御伽草子の絵画コード論入門」『歴史としての御伽草子』ぺりかん社、1996、53～143頁。など

(15) 山東京伝「骨董集」（1814～15）『日本随筆大成 巻八』吉川弘文館、1927、282頁。

(16) 寒川は『梅園日記』を日本の stilts の形状を明示した最古の文献として捉えている（寒川恒夫「比較民族学からみた日本の竹馬の系譜」『遊びの歴史民族学』明和出版、2003、86頁）。

(17) 北静廬「梅園日記」（1845）『日本随筆大成 第三期 12』吉川弘文館、1977、43～45頁。

りて竹馬とす。(中略) 今世、江戸にて竹馬と云ふもの、下図(図1参照—引用者注)のごとくはなはだ異なるなり。七、八尺の竿に縄をもつて横木をくゝり付け、足かゝりとす。』<sup>(18)</sup>との説明文がみられる。同書には竹馬の長さが「七、八尺」(約212.1～242.4cm)と記されているが、文章と併せて図1のごとき挿絵が掲載されている。

次いで、明治初期において来日した外国人が、その客観的な眼差しをもって日本の竹馬を観察した見聞録を紹介したい。明治6(1873)～11(1878)年の期間に日本に滞在したイギリスのAyrton女史は、後年出版された“Child-life in Japan”の中で滞在中にみた日本の竹馬(stilts)について次のような感想を抱いている<sup>(19)</sup>。



図1 『守貞漫稿』に描かれた竹馬にのる子ども\*

※喜田川守貞「守貞漫稿」(幕末期頃) 宇佐美英機校訂『近世風俗志(四)(守貞漫稿)』岩波書店、2001、271頁、より転載。

(18) 喜田川守貞「守貞漫稿」(幕末期頃) 宇佐美英機校訂『近世風俗志(四)(守貞漫稿)』岩波書店、2001、271頁。

(19) Chaplin, Ayrton. Child-life in Japan, London, 1888, p.9.

「激しい秋雨が降った後、道に大きな水溜りができた時、サギアシと呼ばれる竹製の乗り物に乗った少年に遭遇した。この呼び名は、それに乗る姿が白鷺が湿った田んぼの中を長い足でゆうゆうと歩く様子に似ていることに由来するという。実際に私が見た少年は、まさに白鷺のようであった。竹の棒に垂直に楔で止められた横木に足をのせて歩く姿をみると、その乗り物はまるで少年の靴のようであった。」

Ayrton の見た日本の竹馬はサギアシ (Sangiash) と呼ばれていたようであるが、この説明文はあたかも初見の事物を記録しているかのようであり、女史がもともと同種の竹馬を熟知していたとは思えない。Ayrton にとって日本の竹馬の形状や操作方法是、自らの属する西洋文明にはみられない「異文化」の事物であったと推察されよう。

なお、同書には上記の説明文に登場した竹馬に乗る少年を描いた挿絵が掲載されているが (図2参照)、外国人が描いた日本の竹馬が先の『守貞漫稿』の挿絵と基本的な部分で違いがみられないことを確認しておきたい。



図2 Ayrton が見た竹馬にのる日本の子ども\*

※Chaplin, Ayrton. Child-life in Japan. London. 1888. より転載。

以上引用した諸資料から日本の竹馬の操作方法を検討してみたい。まず、胸の前で竹棒を握るといふ姿勢が確保され、進行方向に対して後方に取り付けられた横木の上に足がのせられる。ゆえに、竹馬に乗って前進するためには、右足を前に踏み出す際には必然的に竹棒を握っている右手も前に出る格好となる。したがって、諸資料が伝える日本の竹馬の操作方は今日において「同側の手足を同時に動かす」<sup>(20)</sup>とか、「右手-右足、左手-左足の組み合わせ」<sup>(21)</sup>などと表現されるように、「半身」の姿勢の連続的動作であるといえよう。

本稿は、上記のような日本の竹馬の操作方法と日本古来の歩き方との間には深い関係があるとの考えに基づいている。そこで次に、日本古来の歩行文化について検討することにした。

## 2-2 日本古来の歩行文化と竹馬の操作方法との関係

冒頭で述べたように、武智鉄二は日本古来の歩行(=ナンバ)を農耕生産における半身の姿勢と結びつけて独自の論を展開したが、このスタンスは武智に続いて日本人の歩行文化の解明に取り組んだ研究者にもすべからず踏襲されている。

歴史学者の多田道太郎は、武智のナンバ論の文脈の中で伝統演劇における「すり足」に着目して、労働の基本姿勢の日常化が「ナンバ」であることを是認する一方で、宗教の基本姿勢の日常化が「すり足」であると推論している<sup>(22)</sup>。

また、民俗学者の高取正男は武智がいうような半身の姿勢と関連して、天秤棒を担ぐ労働姿勢を引き合いに出し、「半身のかまきは、われわれ日本人にとって、本来はもっとも自然で、基本的な働く姿勢であった。」<sup>(23)</sup>と述べた。高取の説は、半身の姿勢が農民だけでなく天秤棒を担いで品物を売り歩く商人にも共通する労働姿勢であったことを教えている。加えて、織田淳太郎や木寺英

(20) 松本典子「伝承あそびと運動感覚」『鳥取短期大学研究紀要』48号、2003、81頁。

(21) 小鮒幸洋・藤波努「竹馬乗り歩行の運動解析」『日本機械学会 シンポジウム講演論文集』2006、214頁。

(22) 多田道太郎『しぐさの日本文化』筑摩書房、1972、164頁。

(23) 高取正男『日本的思考の原型』講談社、1975、133頁。

史が近世の飛脚や駕籠かきは、半身の姿勢を保ったまま歩行や走行を行なう「片踏み」によって文書や乗客の運搬を行なっていたことを紹介しているように<sup>(24)</sup>、当時代における日本人の労働の多くは半身を基本姿勢としていたと考え、差し支えはなかろう。

ただし、近代以前の日本人の歩行がいわゆる「ナンバ」歩きであったのかどうかは、実のところ現段階では確証は得られていない。なぜなら、「歩行」という日常の習慣的な動作について、近代以前の日本人が詳しく書き留めることはほとんどなかったからである。また、幕末～明治初期頃の訪日外国人の見聞録には、日本人の歩行の特徴に関する記述が少なからず見受けられるが、その中で日本人の「ナンバ」歩きを明確に指摘した文献は管見の限り皆無であった<sup>(25)</sup>。ゆえに、近代以前の日本人の歩き方を当該年代に綴られた歴史的な資料によって証かすことは難しいといわねばならない。だからといって、先人たちが踏襲してきた学説を反証するだけの理論も今のところ持ち得ていない。したがって、先学の累積の上に立つならば、近代以前の日本人はやはり労働姿勢に由来する「半身」の歩行文化を有していたと捉えるべきであり、その延長線上に竹馬の操作方法の問題を位置づけることが賢明であるといえよう。

日本人の歩き方と絡めて考えるとき、竹馬の操作方法に近似した歩行形態を鈴木牧之の『北越雪譜』（1840）の挿絵にみることができる。図3は、近世においてかんじきと並んで用いられた「すかり」という雪中歩行用具を履いた男性の姿である。牧之によればこの履物は、「冬の雪のやはらかなる時ふみこまぬ為に用ふ。」<sup>(26)</sup>とあり、挿絵をみると先端に長い紐が取り付けられていることがわかる。ゆえに、すかりを履く時は紐を引っ張りながら前進するために、挿絵のごとく同側上下肢が同時に前に出る半身の姿勢が繰り返される<sup>(27)</sup>。注目すべきは、牧之が「すかり」の説明の中で、「なれたる人はこれをはきて獣を追

(24) 織田淳太郎『ナンバのコーチング論—次元の違う「速さ」を獲得する—』光文社、2004、155～158頁。／木寺英史『本当のナンバ常歩』スキージャーナル、2004、37～39頁。

(25) 谷釜尋徳「幕末～明治初期における日本人の歩行の特徴について—訪日外国人の見聞録を手掛りとして—」『日本体育大学紀要』36巻1号、2006.9、1～18頁。

(26) 鈴木牧之「北越雪譜 二編 卷之一」（1840）『北越雪譜』岩波書店、1982、191頁。



ふ也。』<sup>(28)</sup>と記していることである。かつての日本人は半身の姿勢の連続的動作で素早く動くことが可能であったと考えておきたい。

このようにしてみると、労働に由来する半身の姿勢で歩行することは、少なくとも近世までの日本人にとっては無理のない動作であったといわねばならない。したがって、日本人が竹馬に乗る際、胸の前で棒を保持し後方に取り付けられた横木の上に乗って同側上下肢を同時に前に出しながら前進するという操作方法を選び採ったことは、日本人が労働と関連して半身の姿勢を日常態としていたことの成せる業であったといえよう<sup>(29)</sup>。



図3 『北越雪譜』に描かれたすかりを履いて雪中を歩く男性\*  
※鈴木牧之「北越雪譜 二編 卷之一」(1840)『北越雪譜』岩波書店、1982、191頁、より転載。

(27) 演劇評論家の大矢芳弘は、この類の履物に関して次のような見解を示している。「何より興味深いのは、その引き上げる力を少しでも楽にする為に、かんじきの鼻緒に長い紐をつけて手で引っ張るように工夫されているものがあって、それを履いて歩行する場合、まるで竹馬に乗るかの様に、右足を上げる時には右手を振り、左足を上げる時は左手を振るナンバの動作を生じるのである。」(大矢芳弘『「ナンバ」源流考』『歌舞伎 研究と批評』26号、2000.12、175頁)

(28) 鈴木牧之「北越雪譜 二編 卷之一」(1840)『北越雪譜』岩波書店、1982、191頁。

### 3. ヨーロッパの竹馬の操作方法と歩行文化との関係

#### 3-1 ヨーロッパの竹馬の形状と操作方法

先の検討によって、日本の竹馬の操作方法と歩行文化との間には無視し得ない関係性が確かめられたが、ヨーロッパの方にも類似した傾向が見出されるのであろうか。そこでまずは、ヨーロッパの竹馬の様子がわかる絵画や写真を掲げ、次いでその形状や操作方法の問題を検討することにしたい。

フランドルの画家 Brueghel の作品の中に 1560 年頃に描かれた『子供の遊戯』があるが、そこには竹馬に乗って遊ぶ子どもの様子が描かれている。これはヨーロッパの竹馬を確認できる比較的古い資料である。図 4 は『子供の遊戯』の中から当該部分を切り取って掲載したものであるが、画中には高さの違う 2 種類の竹馬が描かれていることがわかる。この作品に詳細な解説を加えた森洋子は、当該の場面を指して「この遊びは練習を必要とするが、一旦マスターすると、次々と高い竹馬に乗れるようになり、それだけ高いところから遠くを見渡せるので、子供にとっても格別の楽しみを与えたのである。」<sup>(29)</sup>と説明している。ゆえに、画中には見られる竹馬の高さの違いは操作の熟練度に帰結する問題と把握すべきであろう。

さて、Lindblom は 20 世紀前半のドイツにおける実例を「1926 年 11 月の初めにドイツのブラウンシュバイクで洪水が起きた際、少年たちは水浸しになった道を竹馬に乗って歩いていた。」<sup>(31)</sup>と報告している。先の Brueghel の絵画に

(29) 無論、先に引いた文献を見る限り、近世の日本において竹馬は主として童戯であったと見なされるが、子どもと労働姿勢との関係は一見して希薄であったようにも思える。しかし、Mauss がいうように人間の日常的な姿勢や動作が各々の文化の中で型として伝承されていくものだとすれば（モース著、有地亨・山口俊夫訳「身体技法」『社会学と人類学Ⅱ』弘文堂、1976、121～156頁）、労働に由来する半身の姿勢が子どもにも伝承されていたと考えるのが自然であろう。ともすれば、竹馬のような遊びが、図らずも子どもに労働に必要とされる半身の動作を伝承するための媒体となっていた可能性もあり得る。

(30) 森洋子『ブリューゲルの「子供の遊戯」—遊びの図像学—』未來社、1989、197頁。

(31) K.G. Lindblom. Further notes on the use of stilts, Stockholm, 1928, pp.3-4.

描かれた竹馬が「遊戯」であったのに対して、Lindblomが例示したドイツの竹馬は足が水に浸からないための工夫として、いわば「実用」の目的で使用されている点に注目しておきたい。

ともあれ、上記の文脈のなかでLindblomは「かつてヨーロッパには河川に架橋されていることが稀であった地域が存在したが、そのような地域では先の例と類似した実用の目的で竹馬が用いられていたと思われる。」<sup>(32)</sup>と述べて、図5の事例に触れている。この絵画についてLindblomは「17世紀のゴレンスカ地方では、河川を渡るために竹馬を使用していた。画中右側の男性は、竹馬に乗る準備をしているところである。」<sup>(33)</sup>と分析する。

このようにしてみると、ヨーロッパにおける竹馬は遊戯性のみならず実用性を帯びた道具としても有効に活用されてきた歴史を読み取ることができよう。

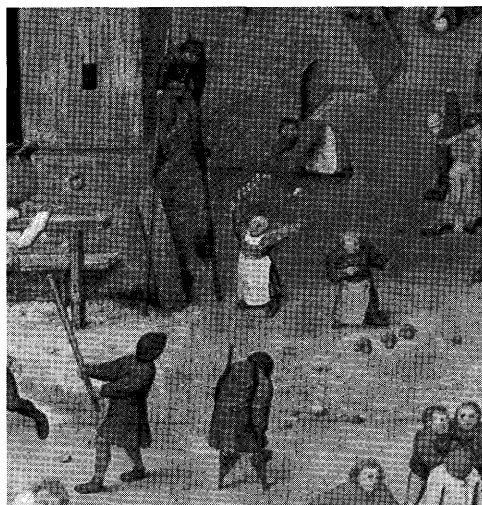


図4 Bruegel画『子供の遊戯』に描かれた16世紀の竹馬(部分)\*  
 ※森洋子『ブリューゲルの「子供の遊戯」—遊びの図像学—』未來社、1989、より転載。

(32) K.G, Lindblom. Further notes on the use of stilts, Stockholm, 1928, pp.3-4.

(33) K.G, Lindblom. The use of stilts especially in Africa and America, Stockholm, 1927, p.35.

ところで、森洋子の『ブリューゲルの「子供の遊戯」』には、19世紀のヨーロッパで用いられていた竹馬の写真が紹介されているが、森によると、この竹馬は「竹」製ではなく「木」製であったという<sup>(34)</sup>。もとより人間1人の重量に耐えうる強度であれば、この乗り物の材質は必ずしも竹に限定する理由はない。ゆえに、日本とヨーロッパとの竹馬の材質の違いは、日本は自生の竹類が比較的豊富である一方で、ヨーロッパではその逆であるという自然条件に起因していると考え<sup>(35)</sup>。

ここで、これまでに紹介した資料を通して、ヨーロッパの竹馬の操作方法を検討してみよう。日本とヨーロッパとを比べてみると、明らかに異なっているのは竹馬を握る位置と竹馬の支え方である。この点に言及したのが Kaudern であったが、彼によれば「ヨーロッパの場合は多少腕を下に伸ばし、竹馬は肩よりも後方で保持する。」<sup>(36)</sup>のだという。この見解を頼りに図4と5を見直してみると、確かに竹馬は日本のように胸の前ではなく身体の側面の位置で握られ



図5 竹馬を利用して河川を渡る人々 (17世紀)\*

\* K.G, Lindblom. *The use of stilts especially in Africa and America*. Stockholm. 1927. p.35. より転載。

(34) 森洋子『ブリューゲルの「子供の遊戯」—遊びの図像学—』未来社、1989、200頁。

(35) 上田弘一郎『竹と日本人』日本放送出版協会、1979、198頁。

(36) Walter, Kaudern. *Games and dances in Celebes : Results of the author's expedition to Celebes 1917-1920* 4, Goteborg, 1929, p.6.

ており、その握り方も「腕を下に伸ばし」ているために日本の場合とは逆に  
なり、必然的に竹馬を背中で支える格好となっている。

次に竹馬に乗る際の足の位置に着目してみよう。日本の場合は、足をのせる  
横木は進行方向に対して後方に位置していた。一方、ヨーロッパの場合は足を  
のせる台は竹馬の内側に向けられ、竹馬に乗る者は左右から棒に挟まれる格好  
になるのである。これでは、日本のような操作方法を試みることは難しいとい  
わねばならない。

上記の内容を踏まえて、以下ではヨーロッパの歩行文化を竹馬の操作方法と  
関連づけて考察することにした。

### 3-2 ヨーロッパの歩行文化と竹馬の操作方法との関係

ヨーロッパの歩行文化を竹馬の操作方法と絡めて考察すべく、ここでは近代  
のヨーロッパにおける軍事訓練の初歩的段階で実施された「歩行訓練」に手掛  
かりを求めることにしたい。ヨーロッパ式の軍事訓練はすでに幕末期の日本に  
採り入れられていたため、日本に残された関連の資料を通して、ヨーロッパに  
おける歩行文化の一端を窺い知ることができると考えたためである。

1857年(安政4年)にオランダ語で原書が刊行され、1866年(慶応2年)  
に日本語に訳出された『生兵教練書』<sup>(37)</sup>という資料がある。同書はオランダ式  
の軍事訓練の概要が記された「教練書」であるが、その内容から訓練時におけ  
る歩行上の要点を探ってみたい。

『生兵教練書』によれば、オランダ式軍事訓練の歩行の要点として次の7つ  
が確かめられる。すなわち、①膝を伸ばして足を地面に平行に下ろすための準  
備動作として、足首を反さずに爪先を地面に向けて歩く。②歩行の際に足先を  
過度に外側に向けてはならない。③上半身を前屈みにして歩く。④膝を伸ばし  
て歩く。⑤集団で隊列を組んで「行進」するとき他の兵士と歩調を合わせる  
必要性から、歩行時に足を高く上げすぎてはならない。⑥足を地面に対して平  
行に下ろす。⑦肩の振じれを防ぐために頭部は正面に固定したまま歩く、とい

---

(37) 『生兵教練書』長門練兵場、1866(山口県立山口図書館蔵)。

う諸点である<sup>(38)</sup>。

このうち、竹馬の操作方法と歩行文化との関係を追求する本稿では、7番目の要点に着目する。『生兵教練書』において当該の内容は、「頭ヲ正直ニス」という項目として取り扱われ「此躰制ハ肩ノ振回ヲ防キ兵士ヲメ方正ニ行進セシムルモノトス」<sup>(39)</sup>と解説されているように、肩の振じれ（「振回」）を防ぐために頭部を正面に固定したまま歩行するよう指示されている。この肩を動かさない歩き方を実践すれば「半身」の姿勢を繰り返すことは不可能である。したがって、上記の歩行の要点が基本的な部分でヨーロッパの歩行文化を反映しているとすれば、日本古来の「半身」の姿勢による歩行文化はヨーロッパの歩行文化とは明らかに異質であるといわねばならない。

次いで、フランス式の軍事訓練の内容を詳述した田辺良輔の『新兵体術教練』（1868）を取り上げる。本書においても「歩行」に関する注意書きが幾分確かめられるが、その中に「両臂を自然に垂らして之を脚の調子に従ひ右の脚を前に出すとき左の臂と同時に前へ出る如く左右交々に手足を相反し運動し…」<sup>(40)</sup>という一節がみられる。これは、右足を前へ出すときは左手を前へ出すという今日的な歩き方の説明であるが、この歩行によって凶らずも「半身」の姿勢が封じ込められていることは言うを待たない。

以上、近代のヨーロッパ式の軍事訓練における歩行の特徴について検討したが、いずれも日本人のごとく「半身」ではなく、身体の向きを「正面」に保った歩行が理想とされていたことがわかる。ここに日本とヨーロッパとの間にみられる歩行文化の違いが明確になろう。それでは、ヨーロッパの歩行文化は彼らが用いる竹馬の操作方法とどのように関わっているのだろうか。

先の検討によれば、ヨーロッパでは身体の側面の位置で腕を下に伸ばした状

(38) このことに関しては拙稿を参照されたい（谷釜尋徳「幕末期におけるオランダ式軍事訓練の歩行の特徴について—日本古来の歩行との比較を中心として—」『東洋法学』52巻2号、2009、3～21頁）。

(39) 『生兵教練書』長門練兵場、1866、31～32丁（山口県立山口図書館蔵）。

(40) 田辺良輔「新兵体術教練」『近代体育文献集成第Ⅰ期 第15巻兵式体操』日本図書センター、1982、13頁。

態で竹馬を握り、竹馬は背中を支える格好となっていた。また、足をのせる台は竹馬の内側に向けられていた。このようにして竹馬を操作する場合、歩行時には多少なりとも同側上下肢が同時に前には出るものの、日本の操作方法にみられたような明らかな「半身」の姿勢が繰り返されることはない。ゆえに、ヨーロッパの竹馬の操作方法には半身の姿勢を最小限に食い止めるための工夫が見られたと考える。なぜなら、ヨーロッパの歩行文化は日本のように労働に由来する半身の姿勢を基本としていなかったからである。歩行文化に照らしてみると、ヨーロッパの人々にとっては、前述したような竹馬の操作方法は理に適った動作であったといえよう。

#### 4. 結び

本稿のねらいは、竹馬の操作方法と歩行文化との関係性を日本とヨーロッパとの比較を通して明らみに出すことであった。以下において、検討の結果を整理することにした。

日本の竹馬の操作方法是、胸の前で竹棒を保持し竹馬の後方に取り付けられた横木の上に乗って同側上下肢を同時に前に出しながら前進するという動作であった。この操作方法是、半身の姿勢が繰り返されるという意味において、労働に由来する日本古来の歩行文化と似通っている。ゆえに、日本人が竹馬の操作方法として上記の動作を選び採ったことは決して偶然ではなく、日本人が労働に関連して半身の姿勢を日常態としていたことの成せる業であったといえよう。

一方、ヨーロッパでは身体の側面の位置で腕を下に伸ばした状態で竹馬を握り、足をのせる台は竹馬の内側に向けられていた。また、日本の場合とは違って竹馬は背中を支える。このようにして竹馬を操作する場合、歩行時には多少なりとも同側上下肢が同時に前には出るものの、日本の操作方法のように明らかな「半身」の姿勢が繰り返されることはない。この操作方法が選ばれたことは、ヨーロッパの歩行文化が日本のように半身の姿勢を基本としていな

かったことに起因しているといえよう。

このようにしてみると、日本とヨーロッパとの間で竹馬の操作方法に違いがみられた理由は、各々が有する歩行文化に異同が生じていたからだと思なすことができる。したがって、冒頭で仮説を提示したように、日本人の歩行文化はそのまま竹馬の操作方法に移し替えられているという関係性が指摘できそうである。

—たにがま ひろのり・法学部講師—